

書評

東村 純子著、『考古学からみた古代日本の紡織』、六一書房、2011年、205頁、3990円＋税

金子 守恵

本書は、弥生・古墳時代から律令国家成立期にいたる紡織技術の変化や生産体制の特徴について考古学的な知見から考察したものである。評者は、アフリカで現在も調理具として頻繁に利用されている土器の製作について、身体技法に注目しながら人類学的な調査研究をおこなってきた。2008年からは、エチオピア起源の栽培植物エンセーテ（バショウ科）の繊維を利用して、在来と外来の技術を組み合わせた製品づくりについて村の人びととともに模索している。古代日本や東アジアに関する考古学的な研究動向や見方からはかけはなれてしまう部分があるかもしれないが、ここではアフリカでの土器づくりの技術的な特徴や繊維製品の開発をめぐる人びとの営みをよりどころにしながら、「もの」をつくる技術を人間の社会的な行為としてとらえる立場にたち、本書でふれられている紡織技術の特徴や変化について検討したい。

本書は、2009年に京都大学文学研究科に提出された博士学位論文をもとに出版されている。序章と終章をふくめると全部で7章構成である。目次は以下のとおり。

序章：本書の目的と課題

第1章：紡織研究における視野

第2章：糸をつくり、経を揃える

第3章：布を織る

第4章：古代日本と東アジア紡織技術の展開

第5章：律令国家の成立と紡織体制

終章：総括と課題。

序章において「紡織とは、糸をつくり、経を揃え、機をつかう技術の複合である（1、以下本書からの引用はページ数のみ示す）」と述べられているとおり、著者は紡織の技術的な特徴としての複合性を念頭におきながら論をすすめている。もちろんひとつひとつの工程それ自体も単純なものではない。たとえば「糸をつくる」といっても、繊維の取り出し方、繊維の撚り方、撚った糸の巻き方など、数々のこまかい手順が存在する。すべての作業は、その次におこなう作業に作用し、最終的にはできあがった織物の出来映えに影響をあたえる。このようにさまざまな手順は完成する「もの（織物）」に影響をあたえるが、それと同時に、その作業においてつかわれる道具や完成した「もの（織物）」は、それを担う人の動きやそのものを介した人と人の関係などとも密接にむすびついている。ここで、紡織の技術的な特徴を検討することによって、人間の行為やそれにとまなう社会的な事象、さらには国家や制度までも語る事が可能になる。

紡織にかかわる遺物はほとんどが有機質で認識されにくいいため、考古学における紡織研究は難題であった(159)。そのような状況のなかで、著者は、古代日本の木質遺物のなかで紡織具の木製部品の特質を把握したうえで、文献資料などもまじえながら、古代日本における律令国家と紡織の生産体制が成立するまでについて議論を展開させている。もちろん木製部品の形態的な分析を可能にした背景として、古代日本の木質遺物に関わる考古学的な研究が蓄積されてきたことや、近年紡織具の木製部品が数多く発掘されはじめてきた(2)ことが、この研究をすすめるうえで不可欠であったことはまちがいない。だがそれと同時に、著者は「遺物(もの)」自体が発信するさまざまな情報を見極め、それらの要素を精緻に分析しその結果を積み重ねることによって、古代の日本に生きた人間の身体動作の断片を描くことにとどまらず、律令制成立期の紡織体制が製糸と製織の分業体制であったという大きな枠組みを見事に描きだすことに成功している。その過程で、弥生時代の原始機が「直立式(経巻具と布巻具に経の端をそれぞれ固定して織りの作業をおこなう)」であったという従来説に対し、出土したときの位置や部材の形態を詳細に検討することによって、それが「輪立式(経送具と布送具に経を輪状(螺旋状)にかけて織りの作業をおこなう)」と共存していたことを指摘した。このように「もの」を丹念に分析するというアプローチと、そこから国家の成立やその制度までも描きだそうとする姿勢は、これから文化人類学的なアプローチで「もの」について研究をすすめようと考えている人にとっては非常に参考になる点である。

「糸をつくり、経を揃え、機をつかう」という一連の過程には、数多くの道具が使われる。著者は、糸つくりや機織りに関わる木製部品のなかでも、紡錘や認めなどの糸をつくる道具や、織機の部品である布送具や経送具などの木製部品を中心に微細な形態的分析をおこなった。そのなかで、評者にとって以下の点は非常に興味深かった。まずひとつめは、糸つくりの作業に関わる道具を分析することを通じて、道具の規格化とそれにともなう身体動作との結びつきを指摘している点である。たとえば著者は、紡錘(回転軸(紡莖)とこれにはめ込む円盤状の弾み車からなる(21))の出土時期と地域、およびその形態的な特徴を検討したうえで、8世紀以降には西日本と東日本に規格化された鉄製紡錘が志向されていたことを指摘した。そして、絵画資料などと照らしあわせただけで、鉄製紡錘の出現と普及にともなって、手で紡錘を転がして糸を撚る方法から、手押台や手押木を用いる方法へと変化したと考え、道具の素材の変化が使用方法の変化とむすびついている可能性を指摘した。

これらひとつひとつの分析結果は、それが単独で示されただけでは微細な事実でしかない。だが本書は、それらを積み重ねることによって、複合性をもった紡織の技術的な特徴の全体像を描きだし、さらには、完成物(織物)の規格化と紡織技術との関係性をあきらかにすることを可能にしている。それは、律令制の成立期における中央政府と地方諸国との関わり方を推測するうえで重要な証左のひとつともなりうる。国家や制度の確立過程に注目するとその規格化、標準化に力点がおかれがちになるが、紡織技術の変化をその過程に重ねあわせると、それぞれの地方に暮らす紡織にたずさわる人びとがさまざまな素材(とくに麻など植物繊維)との関わりや社会的な状況のなかで多様な技術を発達させていく姿がうかがえる。それは、たとえば群馬県の上細井型経送具のように、操作上の簡便さを追求して輪立式の織り技術を洗練させたり(85)、佐賀県平尾二本松遺跡例のように輪立式で

織幅が50センチメートルを超えるようなものにとりくんでいたりすること(147)などがあげられる。

ふたつめに興味深かったのは、著者による数々の微細な分析の積み重ねが、律令制の成立期における規格化の動きとそれへの地方の対応の仕方を描きだすことを可能にしている点にある。たとえば、徳島市観音寺遺跡で発掘された大量の木製品(木簡や紡績具の木製部品など)からは、大化前代においてこの地域では、在来の輪状式をもちいる一方で、比較的あたらしい要素でもある直状系の製織技術が導入されていたことが示唆された(150)。ほかにも、愛媛県松山市や埼玉県行田市池守遺跡などの発掘調査からは、地方の国造クラスの家族がそれぞれ独自の紡績技術を続けながらも、麻と絹を素材とする集約的な生産体制を展開していたことがあきらかになっている(151)。文字資料だけを分析していたのであれば、律令国家形成期の税制度における布の幅や長さの規格化といった事実が確認されるだけであったかもしれない。遺物という「もの」をたんねんに分析したからこそ、その規格化が含意する意味(たとえば本書で指摘されている、「尋」が身体尺に基づく単位であり人間の労働量が布に換算され、さらにそのことが国家権力と関連性をもって分析されること(151))や中央政府の支配体制確立過程における地方の製織技術やそれに関わる生産体制の独自性といった特質を浮かびあがらせることができたと考える。

本書が提出するひとつの完成された論に、更にあらたな視点を加えることをのぞむのは、いささかよくばりであると思うが、あえてあげるとするならば、以下の2点を指摘したい。ひとつめは、本書に「今後の課題」として著者が述べている事でもあるが、それぞれの地域の特色を、紡績具ばかりではなく完成物である織物の分析もふまえて検討する視点である。アフリカの土器製作の調査で実感することは、利用者の注文があってはじめて新しい形態が創りだされているということであった。アフリカの土器と古代日本の織物を同じ特質をもったものとして論じることには無理があることを承知で述べれば、人と人をむすぶ社会的なものという点で、土器でも織物においても、つくるという行為は、素材とつくり手との関わりの結果としてだけでなく、それをつかう人(必要とする人)とつくり手との関わりの結果としても位置づけることができる。完成物の利用の仕方やその社会的な位置づけ、流通の仕方などもふまえると、社会経済的な文脈をとりこんだ紡績技術の複合的な特質をえがきだすことができると考える。おそらくそれは、織物の利用の仕方ばかりではなく、流通の仕方やそれが創りだす社会的な関係なども含めた、もの(織物)と技術(紡績)からとらえた古代日本の社会システムをえがきだすことにもつながるのではないだろうか。

ふたつめは、先に述べた点にも関わることであるが、前述した見方をふまえてこの時代の人々による外来の紡績技術の受け入れ方や、日々の暮らしにおける技術的な実践、さらには古代日本のなかでも地域ごとに発達した技術の多様性に着目し、古代日本における独自の特質と、東アジアや東南アジアにおいても同様に観察されるであろう技術的な特質を比較検討する視点である。ものをつくる技術は、個々のつくり手の才能や国家の制度や権力によって一方向的/因果論的に変化するだけではなく、つくり手やつかい手の日々の営みや社会的な関係のなかでさまざまな方向へと変化・革新する側面があると評者は考えている。アフリカにおいて植物繊維をもちいて在来の技法を生かしたものづくりを模索していると、ひとつの基準を尺度にしてそのなかで優れた技術へと収斂させていくことが社会

的な発展へとつながる、という見方をもつ人に出会うことがある。古代日本のさまざまな地域において、そこに暮らす人びとが、外部の影響を受けながら多様な技術を発達させ、それと密接にむすびついた社会的なシステムを構築させてきたという歴史的な事実は、私たちが生きる社会において多様な技術のあり方や生のありようを受け入れ実践していくうえで、大きなよりどころとなるのではないかと考える。

本書は、タイトルはもちろんのこと、その内容や分析の仕方などをみても考古学の専門書であることにまちがいはない。だが、考古学を専門にされている方のあいだだけではなく「もの」に関心をもって文化人類学的な研究をすすめている人にとって、本書は「もの」とむかいあって研究することの醍醐味を実感できる一冊である。